

## 理学部1号館東棟が遂に完成

星野 真弘 (副研究科長／地球惑星科学専攻 教授)

**理** 学部1号館3期（東棟）が4年余りの歳月をかけてようやく竣工した。東棟建設計画は2013年度の概算要求で認められ2013年12月から旧1号館の取壊しをはじめ、建設前に埋蔵文化財発掘調査や地域住宅環境調整などもあり当初の予定より遅れたが、この度待ちに待った真新しい東棟が2017年末に完成し2018年4月より本格的に利用できるようになった。

理学部1号館整備計画は、旧1号館の老朽化および狭隘化を解消すべく、20年以上前に3期に分けた工事計画が立案され、第1期（西棟）が1998年に、また第2期（中央棟）が2005年に完成し、今回の第3期（東棟）



理学系研究科等の総合図書館として新設の「理学図書館」



オープンラボトリー

で長年の夢がようやく実現したことになる。今回の理学部1号館東棟では、将来の理学部・理学系の長期的な教育・研究の発展を考え、3つのコンセプトが組み込まれた。

1) まず、理学部・理学系研究科の総合図書館をつくることで、フローア続きの3階と4階に物理・天文・地惑・生物関連の図書を一堂に集約致した。また、静かに勉強できる学習スペースや多様なサイエンス分野の雑誌や研究資料を閲覧できるコーナなども設けた。

2) 2番目のコンセプトは、理学部・理学系で利用する講義室である。2階と3階には、200名程度を収容できる大講義室から50名程度の小講義室まで大中小の講義室を5つ配置した。現在改修している中央棟3階の旧物理専攻図書室跡につくる4つの講義室も合わせると総面積およそ1,000平米の共通講義室群が完成することになる。Webによる講義室予約システムも稼働しており、講義室を専攻・学科を超えて利用し稼働率を上げることで、従来から専攻・学科専有として使われてきた講義室が他の目的に転化可能になることを期待している。

3) 3番目のコンセプトは、不足している実験室スペースを確保するためのオープンラボトリーである。大型外部資金などによる最先端プロジェクト研究を始め多様なプロジェクト研究などに柔軟に対応できるように、地上6階と地下1階および地下2階にオープンラボスペースを配置した。機動的に利用できる研究スペースとしてご利用いただきたい。

最後に理学部1号館計画はこれですべて完了したが、次の理学系キャンパス計画は、大学全体のキャンパス再開発・整備の中で、東京大学の生命科学の拠点となる理学部2号館新棟（バイオエリューション総合教育研究棟）の建設である。現在、生物科学専攻は赤門の近くの2号館と浅野キャンパス3号館に分かれているが、将来理学部2号館新棟に集約されることを目指す。



東棟新講義室での授業の様子

## 理学部ガイダンス2018報告

田近 英一(教務委員長/地球惑星科学専攻教授)

**2**018年4月18日(水)、駒場キャンパス900番講堂にて、教養学部2年生向けに理学部の全体ガイダンスを開催した。

最初に、大越慎一副研究科長から、理学の意義や面白さ、理学部と社会との関係など、駒場生への熱いメッセージをいただいた。続いて、筆者から、理学部における教育の特色や進学定員などについての簡単な説明を行った。次に、佃達哉キャリア支援室長より、理学部生の90%が大学院へ進学することや、就職率はほぼ100%であるとの説明があった。その後、学科紹介を、各学科の担当教員からそれぞれ5分ずつで行っていただいた。短い時間のために詳しいことは伝えられないが、それでも各学科の魅力は学生に伝わったのではないかと感じられた。

ガイダンスの出席者数は、過去3年間、150名、250名、320名と右肩上がりが増えてきたが、今年度は一昨年度と同じ約250名であった。昨年度は受入保留アルゴリズムが初めて採用されたということや、今年度のガイダンス日程が早かったことなどが関係しているかも知れないが、理由はよく分からない。ただいずれにせよ、ガイダンスは十分に盛況だった。その翌日から行われた各学科のガイダンスも、例年並みの盛況だったとのことである。

今年度もたくさんの優秀な学生が理学部へ進学を希望していただけることをぜひ期待したい。



理学部ガイダンスの様子

## 濡木理教授が2018年春の紫綬褒章を受章

塩見 美喜子(生物科学専攻 教授)

**生**物科学専攻の濡木理教授が、学術・芸術・スポーツ分野で著しい業績を挙げた功労者に授与される紫綬褒章を受章されました。心よりお慶び申し上げます。濡木教授は、生体内で重要な機能を担うタンパク質のX線結晶構造生物学に長年に渡って取り組み、数々の素晴らしい業績を残して来られています。とくに、脂質二重膜に局在する輸送体タンパク質や、ゲノム編集技術として名高いCRISPR-Casに関する業績は、今後、創薬や疾患治療に繋がる可能性を秘めており、国内外の生命科学研究領域に大きなインパクトをもたらしています。通常、輸送体タンパク質は脂質二重膜に埋め込まれた状態で機能するため、高品質な結晶を得ることは困難であるといわれていましたが、濡木教授は脂質キュー

ビック法などを世界に先駆けて取り入れることによってその問題をいち早く解決しました。最近では同じく膜局在型タンパク質であるGタンパク質共役受容体の結晶構造にも成功されています。CRISPR-Casに関しては、Cas9やCas12aの複合体構造を世界で初めて解明したのみならず、Casが標的DNA配列を認識、切断に至るまでの反応過程において重要なアミノ酸を同定、それらに変異を導入することによって応用性の高いCasの構築にもチャレンジされています。今回の受章は、濡木教授の、世界的に評価の高い先駆的研究による学術への貢献や優秀な若手を育てるリーダーシップが高く評価されたものであることは言及するまでもありません。今後の益々のご発展をお祈りいたします。



濡木理(生物科学専攻教授)